

東京新聞への投書―ポツ

下山房雄

赤馬ヶ関から海老名に戻った。学長を辞めればストレス減で血圧は下がりますとの下関の医師の予言どおり、三ヶ月の地域左翼活動家のおじいさん（駅頭宣伝活動で対する自民党は青年達、こちらはおじいさん達という現代的風景になる）の一人としての徹底自由な生活を経ての7月初旬、下関から運んだ降圧剤が終わったとともに連日、高血圧状態を脱出した嬉しい境地に達した。ところがである。7月11日から再び高血圧になってしまった。残念な参院選によつてだ。

今回参院選の結果は、自社の二大政党説（右翼―左翼のイギリス型で、現在の右翼―右翼のアメリカ型とは違うが……）の横行のもと、大阪の志賀義雄や川上貫一を除いてどうしても共産党が議席獲得に及ばなかった50―60年代を想起させる。その50―

60年代状況への復帰が、30年代復帰（今度は自前の戦争国家ではなくて、ブレアのイギリスと並ぶアメリカの忠犬として世界的規模での戦争参加国家となるが……）への過渡にならぬように、様々な戦線Ⅱ生活領域での階級闘争に頑張りたいと改めて思う。

そんな気持ちで、自民・民主が競ってアピールしている「構造改革」を批判する投書を『東京新聞』に行った。日刊商業紙で安いという理由だけで4月から取り始めた『東京新聞』だが、「英国―ヨーロッパに統合されるのか、米連邦の51番目の州になるのか。……日本―東アジア共同体に日本が統合されるか、米連邦の52番目の州になるか。」との結論を持つドナルド・ドーアの論評を載せたり、参院選前日には「9条改憲は、イラクで自国兵60名の生命を捨てたブレアの途」との記事を載せたりしている傾向に氣を好くしての行為である。しかし結果はボツだった。せめて「かながわ総研所報」の読者には読んで頂きたく、改めてここに投稿する次第である（下掲）。

3大紙と比べ、はるかに批判的報道に豊かな『東京』だが、4月韓国総選挙、5月インド総選挙における左翼の進出を無視、専ら二大政党間での与野党逆転という視角からの報道という限界があった。そこに私の投書をボツという限界が重なったわけだ。

「構造改革」への疑念 無職 下山房雄 71（神奈川県海老名市）

「構造改革」や「行政改革」は唱えれば喝采を博す政策だが、本当に庶民が嬉しが

って受け止めてよい政策なのか。貴紙『東京新聞』七月九日の三面記事トップ「仕事さえあれば 一人のホームレスの死」はそういう疑念を改めて起こさせるものだった。記事は、全国自殺者三万人、上野公園ホームレス千人という背景的数字とともに、この一年余りにあった四組の心中を含む一七人の自殺者の死に場所が書き込まれた上野公園地図を掲載していた。リストラによる労働者の解雇、規制緩和による業者の倒産廃業がこの惨劇の根因にある。「改革」の痛みだけ受けた人々と、その成果で業績回復した大企業との対比をすると、これでよいのかとの疑念が強く湧く。

それだけではない。「改革」は勤続を重ねたベテラン労働者を削減して、仕事に未熟な低賃金の非本雇い労働者と入れ替えた。きちんとした研修も無しにである。この労働力劣化のため製品やサービスの劣化がおきているのも無視できない日本産業の現状だ。相談等の窓口に殆ど事情を知らない人が配置されたり、鉄道員や郵便局員が営業規則の初歩で間違ったりの実例に私は再三でくわしている。反「構造改革」的改革が必要なのではないか。

(NPOかながわ総研「研究と資料」2004年月号、129号)